怪物屋敷

柳川春葉

青空文庫

私が北豊島郡染井の家に移ったのが、明治三十五年の春であった。何しろ滅法安値い家で、立派な門構に、庭も広し、座敷も七間あって、それで家賃が僅かに月三円五十銭というのだから、当時まだ独身者の自分には、願ったり適ったりだと喜んで、早速その家に転居をすることに定めたのであった。一寸その家の模様を談してみると、先ず通路から、五六階の石段を上ると、昔の冠木門風な表門で、それから右の方の玄関まで行く間が、花崗石の敷石伝い、その間の、つまり表から見ると、門の右側の方に武者窓のような窓のついている長屋が三軒あって、それも凡てこの家に附いているのだ、この長屋というのは、何れもこれも、最早長年人の住まわなかったものか、床も壁も、ぼろぼろに頽れて、戸をあけて内へ入ると、一種嫌な臭気がプーンと鼻をつく、それ故以前に居た人なども、物置にでもつかったものらしい形跡がある、こんな風に、三軒が皆行き通しのようになっていて、その中央の家の、立腐れになってる畳の上に、木の朽ちた、如何にも怪し気な長持が二つ置いてある、蓋は開けたなりなので、気味悪る悪る内を覗いて見ると、別に何も入っていないが、その辺には真黒な煤が、堆く積っていて、それに、木の片や、藁屑等が、乱雑に散かっているので実に目も当てられぬところなのだ、それから玄関を入ると、突当りが台所、そのまた隣の間というのが頗る怪しいものだ、何しろ四方が凡て釘付になって不開の間ともいった風なところなので、襖戸の隙から見ると、道場にでもしたものか、十畳ばかりの板敷で、薄暗いから何となく物凄いのだ、その傍の細い椽側を行

くと、茶席になるのだが、その間の矢張薄暗い椽側の横に、奇妙にも、仏壇が一つある、その左手のところは、南向に庭を眺めて、玄関の方からいうと、六畳に四畳半に十畳というように列んでいる、その十畳というのが、客座敷らしい、私は初め其処を書斎にしてみたが、少し広過ぎるので、次の四畳半に移った、六畳の方は茶の間に当てたのである、転居した当時は、私の弟と老婢との三人であったが、間もなく、書生が三人ばかり来て、大分賑やかに成った、家の内は、先ずこんな風だが、庭は前云った様に、かなり広いが、これも長年手を入らぬと見えて、一面に苔が蒸して、草が生えたなりの有様なのだ、それに座敷の正面のところに、一本古い桜の樹があって、恰も墨染桜とでもいいそうな、太い高い樹であった、殊に茶席の横が、高い杉の木立になっていて、其処の破れた生垣から、隣屋敷の庭へ行けるのだ、ところが、この隣屋敷というのが頗る妙で、屋敷といっても、最早家はないのだが、頽れて今にも仆れそうな便所が一つ残っている、それにうまく孟宗竹の太いのが、その屋根からぬっきり突貫けて出ているので、その為めに、それが仆れないで立っているのだ、その辺は、その孟宗竹の藪のようになっているのだが、土の崩れかけた築山や、欠けて青苔のついた石燈籠などは、未だに残っていて、以前は中々凝ったものらしく見える、が何分にも、ここも同じく、人の手の入った様子がないので、草や蔓が伸放題、入って行くのも一寸気味が悪るいほどであった。

　移って当座は、別に変った事もなかったが、その頃私は常に夜の帰りが遅いので、よく弟や老婆の云うのは、十二時過ぎた頃になると、門から玄関へ来て敷石の上を、カラコロと下駄の

音がして人でも来たかのような音がすると云うので、これは屹度、自分に早く帰らそうとしての事だと思っていたが、強ち、そうばかりでもなかったらしい、何をいうにもこんな陰気な家で、例の薄暗い仏壇の前などを通る時には、私にもあまり好い気持がしなかったが、何分安値くもあるし、賑かでもあったので、ついつい其処に居たのであった。

　すると、秋の或月の夜であったが、私は書生一人伴れて、共同墓地の傍に居る知己の家を訪ねた、書生はすぐ私より先きに帰してしまったが、私が後からその家を辞したのは、かれこれ十一時近い頃であった、何分月が佳い晩なので、ステッキを手にしながら、ぶらぶら帰って来て、表門へ廻るのも、面倒だから、平常皆が出入している、前述の隣屋敷の裏門から入って、竹藪を通抜けて、自分の家の庭へ出ようとした、四隣は月の光で昼間のようだから、決して道を迷うはずはなかろうと、その竹藪へかかると、突然行方でガサガサと恰も犬でも居るような音がした、一寸私も驚いたが、何かしらんと、月光を透して行手の方を見詰めると、何も見えない、多分犬か狐の類だろう、見たらこの棒でくらわしてやろうと、注意をしながら、四五歩前に出ると、またガサガサ、此度は丁度私の家と隣屋敷との境の生垣のあたりなので、少し横に廻って、こっそりと様子を窺うと、如何も人間らしい姿が見えるのだ、こいつは、てっきり盗賊と思ったので、思切り大声を張上げて「誰だ！」と大喝一声叫んだ、すると先方は、それでさも安心した様に、「先生ですか」というのだ、私はその声を聞いて、「吉田君かい」というと、「はい、そうです」答えながら先方は此方を向いて来て、二人が近寄ってみると、先

刻帰した書生なので、「君は、一躰如何したのだ、僕は盗賊だと思ったよ」と笑いながら云うと、吉田は実に不思議だといったような顔をして、「先生、僕は今実に酷い目に会いましたよ」と云いながら語るのを聞くとこうだ。

先刻、八時頃先方の家を出て、矢張この隣の裏門から入ったが、何しろこんな月夜でもあるし、また平常皆が目表に竹の枝へ結付けた白い紙片を辿って、茶席の方へ来ようとすると、如何したのか、途中で道を失って、何時まで経っても出られない、何処をどう歩いたものか、この二時間あまりというものは、草を分けたり蔓に絡ったりして、無我夢中で道を求めたが、益々解らなくなるばかり、偶然先方に座敷の燈が見えるから、その方へ行こうとすると、それがまた飛んでもない方に見えるので、如何しても方角が考えられない、ついぞ見た事のない、谿谷の崖の上などへ出たりするので、自分では確に気は付いていたようだが、急れば急るほど解らなくなって、殆んど当惑していると、突然先生の声がしたので、初めて安心しました、と息をはずましながら談して、顔の色も最早真蒼になっていたので、二人ながら大笑しながら、それからは無事に家に帰ったが、如何にも、この家というのは不思議な所で、後に近所で聞いてみると、怪物屋敷という評判で、人が決して住まわないとの事だった、その怪物の出る理由に就ては、人々のいうところが皆異っているので取止めもなく、解らなかったが、その後にも、また他の書生がこんな事に出会ったりなどして、如何にも気味が悪るかったから、安値くってよかったが、とうとう御免蒙ったのであった。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇　百物語怪談会」ちくま文庫、筑摩書房
　2007（平成19）年7月10日第1刷発行
底本の親本：「怪談会」柏舎書楼
　1909（明治42）年発行
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2008年9月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

怪物屋敷

柳川春葉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/